特集

国境

国家間の政治や経済の関係により、国境の役割はずいぶんと違ってくる。緊張感のただよう国境もあれば、まったく感じさせない国境もある。特集では、国境の諸相を紹介し、人びとがどのようにかかわり合って生きているのかを考察したい。

1991年、エストニアがソ連から独立回復したことにともない、突如設けられた検問所

エストニアとソ連との国境を示す標識と溝

国境の川幅が10メートル以下に迫っている景勝地「一歩跨（いっぽまたぎ）」。北朝鮮の人びともしばしばとおりかかる（中国）

モンゴル人民共和国へ物資を送る国境近くのの集積所（中国）

国境の使命

庄司 博史
（しょうじ ひろし）
本館民族社会研究部

国境の諸相

はじめて国境というものを実体験したときの印象は強烈であった。東西冷戦時代の一九七一年夏、鉄道でソ連からフィンランドへ入国したときのことである。国境の最後の駅で、銃をもった兵士が幾人も列車にのり込み、入国の際の税関申告書を片手に財布の中身からベッドの下まで調べあげられた。列車が国境に近付くにつれ、幾重もの頑丈な鉄条網の柵をぬけながら、窓越しにも監視塔の兵士の鋭いまなざしを感じるほど張り詰めた時間であった。

数年後、今度はフィンランド北部からノルウェーへバスで旅行する機会があった。当時すでに北欧諸国間では国民同士は身分証明書だけで相互入国できることは知ってはいたが、外国人である自分はそうはいくまいと、パスポートを手に検問所を待ち構えていた。やがてバスはバラックのような小屋の前でスピードをおとし、運転手が小屋にむかって手をふるとそのまま通過してしまった。通関職員も見えず、遮断機もない国境にあっけにとられた。国家間の政治や同盟関係が国境にいかに反映するのか、その両極端を見た気がした。

また、一九九二年、バルト三国のひとつであるエストニアの南部での経験である。当時エストニアは、五〇年のソ連支配から独立を回復したばかりであった。ソ連を継承した大国ロシアとは、それまで実質的には行政境界にすぎなかった古い国境の再画定問題で外交ではもめていた。エストニア南部ではまだ国境を示す柵も溝もない森林や畑が多く、しばらくは人びとや物資が往来していた。自分もそれに乗じて幾度かおそるおそる小さな越境をこころみた。しかし、一年も経たないうちに両国間には頑丈な鉄条網の柵や緩衝地帯が設けられ、セトゥ人のように国境の両側に住む人びとは、距離以上に果てしなく遠く隔てる制度によって分断されることになった。

国境と幻想

近代国民国家にとって、領土とそれを囲む国境はその威信にかけても死守すべきものらしい。たとえ何の役にも立ちそうにない不毛の地でもけっして国家は一歩たりと譲ろうとはしない。それは国家民族、国家語などと同じように、国境に取り込むことによって人びとを他から分断し、その均一性と忠誠を確保できると信じる国家の宿命なのかもしれない。しかし実際には、パレスチナやベルファストの例を見るまでもなく、一国の支配下にありながら、物理的な壁とともに、国境以上の精神的な壁が人びとのあいだに立ちはだかっている場合もある。むしろ、そのような地域的な住みわけさえ存在せず、雑居する人びとのあいだにあっても、国民国家が国境に託した甘い幻想は、いたるところで冷酷な現実によって打ち砕かれている。かつて独立回復まえのエストニアではエストニア人の多くは、人口の三〇パーセントをしめたロシア人と決して個人的にまじわることはなかった。

現在、グローバル化が進行するなか、多文化政策の一環として、多様な言語、文化、はては国籍さえ異にする人びとを住民として国家に取り込む方法が模索されている。国家はそのときどのような使命を国境に託すのであろうか。

検問所にある標識。ノルウェーとフィンランドとの国境にて

エストニアとロシアをわけるプスコブ湖。男性の向こう側はロシア領

代理の国境

太田 心平
（おおた しんぺい）

本館先端人類科学研究部

国境のもつ力

中国の遼寧省で長期調査をしている韓国人の研究仲間が、一度ぜひ遊びに来いと言ってきた。「ビジネスマンに観光客に留学生。韓国人がいっぱいいるぞ！」。この誘いに乗って、わたしは昨年九月に初めて中国の地を踏んだ。彼の調査地は大連の東隣りの丹東市。旧「満洲国」について御存知の方には、一九六五年まで使われていた「安東」という地名の方がなじみ深いだろうか。街の東を流れる鴨緑江を挟んで、北朝鮮と接する街である。

彼が調査の足がかりとしているのは、韓国企業の現地事務所。そこを訪れると、同じく中国の青島から三年前に家族連れで移ってきたという韓国人の支店長が、北朝鮮資本の料理店に連れて行ってくれた。他のテーブルで中国語が飛び交うなか、北朝鮮から働きに来ているウェイトレスたちと「韓国」語で話すのは、異民族であるわたしにも愉快だった。「今や青島は韓国企業でいっぱいだけど、ここ丹東はこれから面白いぞ。なんせ国境のもつ力がある」。

支店長の会社は衣料品の委託製造をしている。取引先の工場について行くと、応対に出たのは中国の少数民族のひとつとして認められている朝鮮族のマネージャー、縫製室にいるのは中国と北朝鮮の女性労働者たちだった。

このように中韓朝の三カ国の人びとが行き交うという状況は、この街のいたるところで目にすることができる。中朝が共同統治する鴨緑江に船で乗り出して、わずか数十メートルの距離から北朝鮮の街を見物することは、ここを訪れる韓国人や中国人にとって必須の観光コースとなっている。国境に掛かる橋には、朝は中韓に売る漢方薬や各種工業製品を積んだ北朝鮮のトラックが列をなし、夕方にも同じトラックが積荷を韓国産の家電製品などに替えて並ぶ。極めつけには、河を介して夜な夜な中韓朝の人びとがコミュニケーションをおこなっているという噂話まであり、観光客にとっては格好の土産話ともなっている。

こうした状況に触れるにつれ、支店長のいう「国境のもつ力」というものが、わたしの目にも見えてくるようだった。

朝鮮戦争期に米軍が破壊した古い橋（手前）と、毎日トラックが行き交う新しい橋（奥）

悲しい休戦ライン

では、どうして支店長は中朝国境の力に頼ろうとするのだろうか。

各種メディアでも報じられているとおり、南北朝鮮のあいだの往来は過去数年のあいだに目を見開く進展を続け、韓国人の北朝鮮観光や南北の合同運営による工業団地も軌道に乗った感がある。しかし、交流がいくら深まっても、韓国人にとって南北をへだてる線は軍事境界線、つまりあくまで休戦ラインである。その線を越えることは「出境」「入境」とよばれ、厳しい制約下にあるのが現状だ。肯定的に国境だととらえられるようなものでも、必要に応じて自由に越えられるようなものでもない。一般的な国境のようにはいかない、悲しい線なのである。

ほんらいは北緯三八度にあるその力をほしいままにできないとき、一部の韓国人はビジネスマンや観光客や留学生となり、中朝のあいだに「代理の国境」を見出すのだろう。

丹東市に乱立する北朝鮮資本の料理店。北朝鮮からの出稼ぎのウェイトレスたちがおこなうショーで人気がある

特集 国境

時代を映す鏡 ―中国とモンゴル国の国境の町から

児玉 香菜子
（こだま かなこ）

総合地球環境学研究所
拠点研究員

命の保障から迫害へ

同じ民族でありながら、中国とモンゴル国というふたつの国に分断されたモンゴル族にとって国境がもつ意味は時代とともにめまぐるしく変化してきた。

中国内モンゴル自治区はモンゴル国と長い国境をもつ。そのなかでもモンゴル国ともっとも長い国境をもつのが内モンゴルの最西端に位置するエゼネ（額済納）旗だ。

エゼネ旗は広大なゴビにその上流に降った降雪雨が河川となって流れ込むことで、オアシスが形成されている。ゴビに形成されたオアシスは東西、南北を結ぶ交通と軍事の要衝であった。

エゼネ旗にはエゼネ＝トルゴードとよばれる人びとをはじめ、さまざまな出自をもつ人びとが住んでいるが、なかでも多いのがモンゴル人民共和国（現モンゴル国）に出自をもつ人びとである。というのは、一九三〇年代、多くの人びとが人民革命後の宗教弾圧を逃れて中国へ亡命してきたからである。彼らにとって、国境は命を保障する「境」であった。

その後、一九六〇年代よりはじまる中ソ対立によって、国境がもつ意味が大きく変化する。軍事的な緊張が高まるにつれて、国境が完全に遮断され、多くの軍人が駐在するようになる。まさに国境は軍事的なシンボルであった。現在でも、当時の塹壕を国境近くで散見できる。

一九六六年からはじまり一〇年間にわたって吹き荒れた政治的混乱、文化大革命では、モンゴル人民共和国から亡命してきた人びとの多くがスパイとして迫害された。また、モンゴル国とやりとりをしていた人、訪問したことがある人も迫害の対象となった。皮肉にも、命を保障する国境が迫害の原因となり、政治的な象徴となったのである。

経済的な窓口として

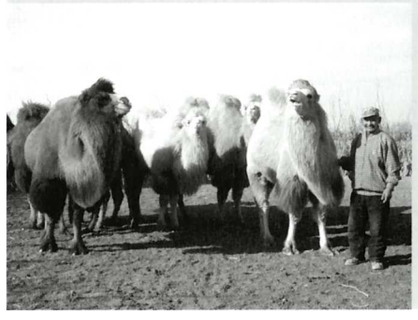
次いで、一九八九年、中ソ和解によって国境が開かれるようになると、エゼネ旗の国境は経済的な窓口となる。モンゴル国から畜産品をもった多くの人がやってきて、さまざまな日用品を大量に買い込むようになったのである。

現在、中国政府は環境破壊を避けるため石炭を輸入に切り替えている。輸入先のひとつがモンゴル国である。エゼネ旗の北に良質の石炭を産出する鉱山があるため、ここが輸入の窓口となって大量の石炭が運び込まれている。その石炭を中国各地に運搬する大型トラックが押し寄せている。さらに、石炭を運搬するための鉄路の建設が急ピッチで進んでいる。建設作業のための労働者、宿泊施設、食堂など、町が急速に拡大している。鉄路はさらに多くの人を引き寄せるであろう。国境は、いつでも国の政治経済的な状況を反映する鏡であった。今や、エゼネ旗の国境は激動する中国の象徴となりつつある。

1930年代にモンゴル人民共和国から逃亡してきた兄と、その後エゼネ旗で産まれた妹

石炭を積載したトラックと、モンゴル国から運び込まれた石炭の山

かつてはラクダによって国境を越える交易がおこなわれた



北の国境、南の国境

鈴木 紀
（すずき もとい）

本館先端人類科学研究部

アメリカへ出稼ぎ

メキシコには二本の国境がある。一本はティファナからマタモロスにかけて約三二〇〇キロメートルにおよぶアメリカ合衆国との国境である。もう一本はタパチュラからチェトウマルにかけて約一〇〇〇キロメートルのグアテマラ、ベリーズとの国境である。メキシコ人の生活にはこれら南北二本の国境が大きな影響をおよぼしている。

メキシコ南部チアパス州のソコヌスコ地方はコーヒー栽培を主産業とする農業地帯である。ここで農家の女性たちと話していると、メキシコ人と国境とのかかわりが見えてくる。フロンテラ（国境）とは普通、近くのグアテマラ国境ではなく、はるか遠くのアメリカ国境を意味する。アメリカで稼いだ金で立派な家が建ったという話をよく聞く。人びとは国境の向こうの富に憧れているのだ。

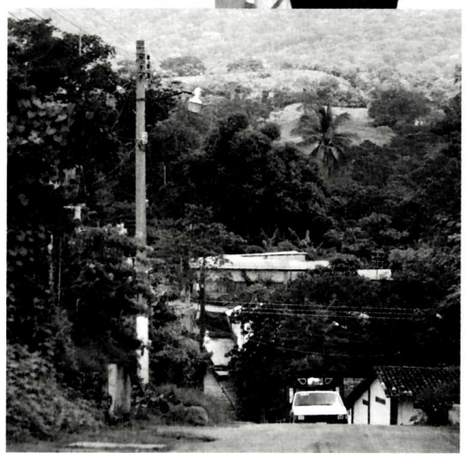
しかし実際に国境を越えるのは容易ではない。グロリアの夫は最近アメリカへ行った。夫の話をするとき、彼女は声をひそめる。正式なビザがなくてもアメリカへ入国させるブローカーとどうコンタクトをとるか、そのブローカーに払う高額の手数料をどう工面するか。国境を越えるには、大きな声では話せないことが多い。

一方、国境を越えた出稼ぎに批判的な声もある。ルーペは夫とともにコーヒー作りに精出す女性だが、二〇〇七年は政府の補助金の支給対象から外れたといって不満顔。金を受けとったのは、夫がアメリカへ出稼ぎ中の世帯の妻たちだという。ところがそうした世帯のコーヒー畑に限って、ろくに手入れもされず荒れ放題のことが多い。さらにルーペは主食のトウモロコシ価格が近年急騰しているのはメキシコ人の出稼ぎと関係があるといぶかる。アメリカ人はメキシコ人を雇ってトウモロコシを作り、メキシコへ輸出する。メキシコ人は稼いだ金を母国の家族に送金し、家族はアメリカ産のトウモロコシを食べる。これが事実とすれば、儲けているのは出稼ぎメキシコ人ではなく、国境をはさんでトウモロコシの生産と流通を支配するアメリカ人企業家たちというわけだ。

グアテマラ人に期待

ところでルーペが補助金にこだわる理由は何だろうか。補助金があれば人手を雇ってコーヒーを効率的に収穫できるからだ。とりわけ勤勉で従順、豆だけの食事でも文句をいわない出稼ぎグアテマラ人が狙い目だ。コーヒーの収穫期、彼女の村では住み込みで働くグアテマラ人の姿をよく見かける。南から北へ、国境をはさんで賃金は階段状に上昇する。そのあいだで暮らすルーペは、北の国境を越えていくメキシコ人に憤慨しつつ、南の国境を越えてくるグアテマラ人を待望している。

ソコヌスコ地方の農村。男性は出稼ぎが多く女性と子どもが目立つ



ソコヌスコ地方の農村。アメリカへの出稼ぎが多い

ペルシア湾の小島

山中 由里子
（やまなか ゆりこ）

本館民族文化研究部

海の上の国境

海の上には物理的に国境線を引けない。国連海洋法条約では、海岸線から二〇〇海里（約三七〇キロメートル）より沖は「公海」とされ、国と国が接する「国境」は海原にはない。だが境目が曖昧であるからこそ、海域をめぐってナショナリズムはぶつかり合う。名称問題だけでも議論が尽きない。ペルシア湾かアラビア湾か、イギリス海峡かラ・マンシュか、日本海か東海か韓国海か…。

二〇〇七年春、イラク領海をパトロール中の英海軍兵士一五人がイラン領海を侵犯したとして拘束されたころ、わたしはちょうどイラン滞在を計画していた。しかも、これまで訪れたことがなかったペルシア湾岸まで行ってみたいと思っていた。幸い出発の前日にイギリス人兵士たちは「恩赦」で解放され、国際危機には至らなかった。

ペルシア湾に臨む

こんな事件の直後だったこともあり、海自体がまだピリピリと電気を帯びているようなイメージを抱きながら、イラン人が行楽に訪れる島、キーシュに行ってみた。キーシュはイラン本土南岸から一八キロメートル沖に浮かぶ小さな島だ。最近のイランの中流家庭はドバイ観光を好むようであるが、国内の保養地としては比較的インフラの整ったキーシュの人気は根強く、何かと話題にのぼるので一度は見ておきたかった。

島の目玉は、広大な鳥類園と、イラン唯一と謳われるイルカショー。海岸沿いにはホテルが建ち並び、なかでも数年前にオープンしたばかりのダリユーシュ・グランド・ホテルは、アレクサンドロスに滅ぼされたアケメネス王朝の都ペルセポリスを再現したかのような建物自体がアトラクションと化している。ラスベガス的なキッチュな雰囲気は拭いきれないものの、実物のペルセポリスに迫るそのスケール、特に正面の列柱廊と門は結構迫力があり、興味深い歴史の疑似体験となった。

キーシュはいわゆるフリー・ゾーン（経済特区）でもある。買い物目的で訪れる観光客も多いらしく、島の中心部には巨大なショッピングセンターがいくつもある。

他のリゾート地と違うイランならではの特徴といえば、女性専用の海水浴場が隔離されていることだ。女性が公共の場で顔と手以外の肌を露出してはいけないという法律のあるイランでは、水着姿なんぞを他人の男に晒すわけにはいかないのだ。それでも、ズボンのすそをたくし上げ海に入り、海水浴をする家族を一心にビデオに収めているお母さんたちの姿が男性用ビーチの端の方では見られた。この海の沖を外国の戦艦が行き来しているとは思えない、平和な光景だ。

海は遠浅で澄んでいる。波はほとんどない。小さな魚が群れ、日本の海辺だったらすぐに捕って食われてしまっているであろうウニもいる。ムスリムは、ウロコのある魚を食べることは許されているが、貝・甲殻類・ウニ・タコなどはあまり食べない。

わたしも足だけ海につけ、日向ぼっこをするヤドカリたちを眺めながら、こんな美しい浜辺に戦車が上陸してくるような事態になりませんように、と祈った。

ヤドカリが岩で日向ぼっこ。沖縄の海？いえいえペルシア湾です

足と腕を露出し、取締りを受ける可能性があるにもかかわらず、家族と一緒に海に入る女性

特集 国境